

二か月前。『01・妖精さんとの出会い（靴屋の小人と白雪姫）』から約一か月後。八月下旬。時間帯は十四時ごろ。天気は晴れ。気温は十八度程度で、今日も過ごしやすい。

サリア、今日も自宅から機械人形を飛ばし、主人公のサポートをしている。

例によつて一度席を外し、自室の定位置まで帰ってきたところだ。

手元の飲食物はコーヒーのみ。とりあえず、見ながらお菓子を食べるのはやめた。

この一か月ほどの間、サリアは、機械人形を使って主人公の冒険を見守り続けた。並行して、人形を定期的に帰還させてメンテナンスをしては、少しづつチューンナップも行つてきている。

つまり、現在の機械人形は、前よりもかなり性能が上がつた。

主人公に存在がバレたので、腹をくくつて、より『使える感じ』を目指したのだ。目玉は『緊急離脱』の魔法だ。

これはその名の通り、主人公が危機に陥った時、あらかじめ指定した転送先までワープさせる魔法である。

転送先は、サリアの自宅。

自分の手が届かないところへ送る訳にはいかないからこうなつたが、できるだけ使いたくはない。本当に最後の手段だろう。

ちなみに、機械人形のお腹が方バつと開いて、そこから医療キットが飛び出す仕様は、主人公には不評である。曰く、グロテスクすぎるらしい。

『ただし医療キットは腹から出る』はダメだとの事。

勇者ちゃんつてば、なーんか妖精さんを本当の生き物だと思いたいみたいでさあ。

妖精さんがメカメカしい動きをすると、ちよつとショックみたいなのが。可愛いよね♥

さてさて、そんな主人公ちゃんは、ちゃんと冒険できるかなー？

現在主人公ちゃんは大陸東部で冒険しているわけですが、ここ、実はサリアちゃんちらそんな遠くないんだよね。

だけど……今回はメンテナンスとアップデートに時間がかかっちゃった。  
だから、会うのは三日ぶりくらいかな？

本当は離れてる間も主人公ちゃんの事見つめたいけど、遠見の魔法の限界でね。

『あたし自身が触れた事のあるもの』しか、水晶球でウォッキングできないのよ。つまり、あたしは機械人形に直接タッチしてるから、機械人形の現在地からは、ウォッキングできる。

でも、あたしは主人公ちゃんに触れた事はない。

それから、機械人形が主人公ちゃんに触れても、サリアちゃんが触れた事にはならないよね？

て事で、主人公ちゃんは現状ウォッキングポイント対象にはならなくて。

機械人形の帰還から、機械人形と主人公ちゃんが再会するまでは、彼女が何をしてるのか、あたしにはわかんない。

ブランクができちゃうんだよね。

まあ、このあたりにいるとは言つてたから、そろそろ見つけられるでしょう。

ふふふ。主人公ちゃん、妖精さんが顔出したら喜ぶかなー？

サリア、ニヤニヤしながら水晶球を見つめると……。

機械人形は、無事に主人公を発見したようだ。しかし、様子がおかしい。

主人公は今、真昼の森にいるのだが……今は川辺の岩によりかかって、座り込んでいるようだ。

しかも……。

……え、うわ!? 泣いてる!? 何があつたの!?  
まさかまた毒キノコ食べた!?

サリア、驚いて機械人形のステルス機能を解除する。

それから、マイクのスイッチを入れ、猛スピードで主人公のもとへ近づく。

**SE1** ..森の環境音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【トラック終わりまで繰り返して流す】

【0—5秒ほどまで流して**SE2**】

**SE2** ..機械人形が主人公に近づく音  
【ストーリーパート1の**SE2**と同じ音】  
【最初から最後まで流す】

そして……主人公の『少し頭上』あたりを陣取る。

このポイントに『妖精さん』と遠見の魔法のアングルを設定するのは、サリア的に譲れないのである。

あのね。サリアちゃん、いや、妖精さんがこのポジションを取るとね？

主人公ちゃんは妖精さんと話す時、必然的に顔をちょっと上げる事になつて。ちょっと目を見開いて、上目遣いがデフォになるのですよ。

（主人公）

「妖精さん……！」

そして……あたしと目が合うと、こうやって。パアアって顔が明るくなつて……それから、ニコって笑うの！

もうこれが可愛いのさー！ 我ながらベストアンダル！

はあ、可愛すぎ。こんなの、放ついたら悪い人に利用されて食い物にされちゃうよ。絶対あたしが守んなきや。

「いかにも『明るくて優しいお姉さん』という感じで

もう！ また泣いてるの？ 顔を上げて。

お待たせ。メンテナンスに時間がかかっちゃってごめんね。  
また一緒に冒険しましよう？」

妖精さんが声をかけ、励ました途端、主人公は涙をぬぐつて大きく頷く。  
それだけでサリアの胸は、ずきゅんと擊たれる。

正直、主人公のような自分好みの女の子に、無垢に慕われるのはたまらない。  
それに……。

〈主人公〉

「……はい！ 妖精さん、会いたかった……！

ずっと、ずっと待つてたんですね。会えて嬉しい……」

主人公ちゃんつてば、こんな素直従順系健気キャラ（推定だけど確信に近いと思つてゐるわ）なんだもの。

あたし、すっかりなつかれちゃつたみたい？

「【すごく嬉しい。だが『妖精さん』を演じているので、落ち着いていられる】

ふふ！ そんなに喜んでくれるの？  
ありがとう。あなたつて本当に可愛いね」

ところで、主人公のサポートをするようになつて、サリアの暮らしは格段に忙しくなつた。

サリアはいかにも無職っぽいオーラバリバリだが、これでも仕事はしている。  
というか、人形師で医師で薬剤師である。

資格ゲッター系女子なのである。勇者の資格は剥奪されたが。

引きこもりではあるが在宅ワーカーとして、人形や薬を街のマジックアイテムショップ、あるいは薬局などに卸したり、ごくまれではあるが……屋敷内で外科手術をしたりする事もある。

ただし人とは最低限の会話しかしない。アシスタンントは実質自分の機械人形だけである。  
……コミュ障だから。

つまり、サリアちゃんは自分の生活だつて忙しいつてえのに、いくら責任があるとはいえた、この子の面倒まで見る事になつちやつて。

毎日めちゃくちや頭使うし、疲れるし、なのにそのくせ眠れない日々を送つているわけ。

いや、何で寝れないかって言うとね……。

だつてー。一日を終えて、一度魔力オフして機械人形を主人公ちゃんに預かつてもらつてる時だつて。

ベッドではその日の勇者ちゃんとの会話を反芻して、ずっとドキドキして。眠るどころじやないし。

明日は一緒にどんな事をしようか、どんな事を話そうかつて、考えなくちやならないでしよう？ 寝れないつて。

でも時間になれば朝は来るわけで、今度は仕事しながら主人公ちゃんを見守る事になるじやない。

忙しいぞ、これ。

でも、一日中、ずっと胸がふわふわ温かい。

主人公ちゃんの事を考へるだけでワクワクして、毎日機械人形越しに一緒に話して、笑つたり、ビックリしたり、嬉しくなつたり。

時には呆れたり、イラつときたり。

でもやつぱり楽しくて。つまり感情の振れ幅が以前よりずっと大きくて。  
あー。あたし、生きてる！ つて感じがするんだ。

今のおたしにとつては、主人公ちゃんと一緒に過ごす時間も、バイバイしてから一人彼女の事を思う時間も、とにかく甘つたるい。

ムカムカライラして、思うようにならない時だつて。

こんなおたしにも、今、こんなにも真剣に想う人がいるつて事実が嬉しくなるの。つまり……充実しちやつてるんだなあ！

という事で、言うまでもないが、主人公とサリアはすでに両想いである。まだ、お互いの事、全然知らないのに……。

要するに二人とも、揃つて他者との距離感がおかしい。もうお互いを、運命の人のように感じてしまつている。

それでも主人公は、こうなるのもわからないでもない。

精神的にも肉体的にも追い詰められている時に、妖精さん……つまりサリアとあんな出会い方をしたのだ。その結果、サリアに強く惹かれてしまうのも、自然な事だらう。

問題はサリアである。

今のサリアは『そんなに主人公の顔が好みなのか？』と聞かれれば『違う！ 中身が好きなの！』と答えてしまふし『では、中身のどのあたりが好きなのか？』と聞かれれば『全

部に決まってるでしょ！』と答えてしまう。

つまり、答えになつてない事に気づかないくらい、主人公に夢中になつてているのである。  
……中身だつて、別に正しく理解している訳じやないのに……。

サリアは知るよしもないが、サリアと主人公が出会つたあの日、主人公は、自分が口にしたもののが毒キノコだと理解していた。

勇者としての辛い日々に耐えかねて、自殺を図ろうとしたのだが、それを全く知らないサリアが助けてしまった。

結果、主人公はサリアを気遣うあまり、また、弱い自分を恥じ入るあまり『辛くて勇者をやめたくなり、自殺しようとした』と正直に言えなくなつてしまつた。

そしてつじつまを合わせるために『空腹のあまり、食用キノコと毒キノコを間違えたバ力な女の子』を演じざるを得なくなつたのだ。そして、今日にいたるのである。

だけどサリアは、今も真相を知らずにいる。

それが実像との大きなズレを生み、この一か月で、それはさらに深刻化しつつある。

今だつて……主人公の涙は、嘘泣き、いや、正確には『元嘘泣き』である。

主人公は、妖精さんが姿を見せないこの三日間が、たまらなく淋しく、不安だつた。

『長くとも三日くらいで戻るから』と言われたものの『もしかしたらもう会えないのかかもしれない』と思うだけで、彼女の胸は絶望感でいっぱいになつた。つまり、すっかり妖精さんに依存しているのである。

だから、主人公は考えた。

自分がまたピンチに陥る、あるいは弱つたそぶりを見せれば……。妖精さんが飛んでくるかもしれない。飛んでは来なくとも、彼女の気を引けるかもしれない。と。

でも、妖精さんはいつも自分を見守つているわけではない。

魔法についてよく知らない主人公は、てっきりそれを万能のものだと思つていたが……何やら、色々制約があるらしい。

つまり、主人公は、妖精さんの存在をやや離れた所から感知した時点で、仕掛ける必要がある。

そこで約束の三日間をめそめそしながらも待ち、約七十時間が経過したあたりで、全神経を周囲に集中させた。

そして耳を澄ませたところ……例の機械人形のモーター音がかすかに聞こえてきたのである。主人公は耳がいい。野生系だから。

そこで、いそいそと岩場に座り込み、あたかも泣いているようなポーズをとつてみた。すると、本当に妖精さんが慌ててやってきたのだ。

主人公はこれが、とても嬉しかった。

「ばびゅん！」と、ものすごい音を立て、血相を変えて現れた妖精さんを見た時、主人公は『自分はこの人に大切にされている』という、暗い喜びに酔いしれた。

それはあまりにも甘く、もつと、もつと欲しくなつてしまふものだつた。

そんな妖精さんからの無償の愛情を受け取つた時、主人公の嘘泣きは本当の涙に変わつた。

それを、サリアは最初から泣いていたと勘違いしたのだ。

それでも主人公には、自分が妖精さんを騙したという自覚はある。

そんな行いを深く恥じながらも、なお喜びを感じている。

自分にここまでしてくれた人は、今まで一人もいなかつたからだ。

だけど、いつまでもバカで頼りないままでは、そのうち妖精さんに愛想を尽かされてしまうかもしれない。

今の主人公は、それが何よりも怖い。だから、変わらなくてはならない。

そこでこの三日間、彼女は『どうしたら妖精さんに見捨てられず、自分たちの繋がりをもつと強固にできるか』を、足りない頭でずっと考えた。  
その方法とは……。

〈主人公〉  
「あの！」

「きよとんとして」

なあに？」

〈主人公〉

「今日は、妖精さんにお願いを聞いてほしくて待つてました。

二つ……あるんですけど」

「何をお願いされるのか、見当もつかない」

私にお願い？ 二つも？」

サリア、来たか……。と身構える。

いずれ、こんな日が来るような気がしていいたのだ。

サリアの思う主人公は『おおむねバカだが、現状に甘んじる事をしない女の子』である。  
そして妖精さんの事を『物知りな年上の女性』と認識しているはずだ。

であれば、いずれ知識欲に目覚めた主人公は、たとえれば食べられるキノコの種類とか、すぐに役立つサバイバル知識とか、そういう事を尋ねてくるに違いないと、サリアは踏んでいたのである。

……合っているけど間違っている。

そんなサリアの机の両脇には、この時に備えて大量の本がドカドカと積まれている。主人公がどんな質問をしてくるかわからないからだ。つまり、カンニングである。

……いいの！ 持ち込みは禁止されてませんから！

稀代の天才魔法使いサリアちやんだって、なんでも知ってるってわけじやないんだぞ！ まあでも、聞かれた事にはなんだって答えてあげますよ？

サリアちゃんは天才だし、勇者ちゃんのお姉ちゃんみたいなもんだし。ここには参考文献つてえものだつてありますからね。かかるつてらっしゃい！

「【とても優しく】

何かな。一つ目から教えて」

〈主人公〉

「はい。まずは妖精さんの事、たくさん教えてほしいんです！」

しかし、ここで主人公が、予想外の事を言い出す。

サリア、嬉しくて恥ずかしくて、コーヒーを吹き出しそうになる。

そ、そおきたかあ。そおきましたかあ！ 参考文献いらねえなあその話題は！  
でつでもお。おつおつおつ、教えてあげない事も、なくてよ？

……って言えたらいいよなあ！ 言える訳ないじやん。

サリアちゃんの正体は、絶対に知られちゃダメ。うまい事ごまかさないと。  
何でダメって。本物のサリアちゃんとか、主人公ちゃんの憎悪の対象でしかないじやん。

〔驚きを何とか隠す〕

私の事が知りたいの？

〔優しくからかう〕

そんなに興味持つてくれるなんて、お姉さん嬉しいな♥」

おい。『なうにがお姉さんだ』なんてツツコまないでよね。

サリアちゃんに姉適性がない事くらい、サリアちゃんにだつてわかりきつてますよーだ。

そう。サリアにだつて自覚はあるのだ。

妖精さんのキヤラ造形は、テンプレに過ぎる。

『キヤラクターの練りこみが甘い』と言われるやつである。と。

妖精さんは、ただでさえ身体が作りものなのに、発言がいちいち白々しい。中身まで作りものじみているのだ。

それでも、こんなあからさまなハリボテを、主人公は慕つてくれる。

……つまりそれくらい、彼女には他に頼れる相手がいないのである。

サリアは、それがとても切ない。

『こんなのは絶対おかしい』と憤り『であれば自分がこの現状を変えてあげたい』『自分だけは味方でいたい』と思つてしまふ。

それがやがて大きな間違いを生む事も知らず、主人公に尽くしてしまふ。

〈主人公〉

「妖精さんは、機械人形ですよね。」

「という事は、妖精さんを動かしている方は、別にどこかにいるって事でいいんですよね」

「あくまで落ち着いた様子で」

「そこまで推理してくれたんだ。」

「その通りだよ。私の身体は機械でできているけど、魔力をエネルギー源として動いている。」

「その魔力を送っているのが、とある魔法使い。」

「つまり、ここから離れた所にいる私の本体だね」

〈主人公〉

「という事は……。その『とある魔法使い』さんが妖精さんの正体で。」

「私にずっと話しかけてくれているのは、その魔法使いさんって事なんですよね？」

「魔法使いさん。お願いです。あなたの事を教えて下さい。」

「私、あなたの事を、もっと知りたいんです」

「弱つてしまふ

あー……。

【優しく、申し訳なさそうに】

ごめんね。これ以上は話せない。

【少し必死に】

でも。私があなたの味方なのは本当だから。

【少し間をあけてから】

それじゃ、ダメかな?』

主人公、静かに、ふるふると首を振る。

それは極めて一般的な動作のはずなのだが、サリアには、それがものすごく可愛く見え  
る。

恋つて恐ろしい。

〈主人公〉

「いいえ。話せないなら、いいんです。

妖精さんが私を助けてくれた事には変わりないですしちゃ……。

それに、妖精さんが自分の事を詳しく話せないのは。

私が頼りなかつたり、まだ信用できなかつたりするからですよね。あと、私は頭がよくないから。

妖精さんは『自分の事をきちんと説明しても、この子にはわからないんじやないかな?』と思つてゐるのかもしません』

サリア、身構える。

……おお? サリアちゃんは今までこの子の事、アホだアホだと思つていたけど……。

それはろくに勉強できなかつたせいで、つまり単に知識がなかつただけで。

実は磨けば光るやつで。意外と油断できないうタイプだつたり、する?

「[言いよどんで。申し訳なさそうに]

えつと。そうじやないの。

私が素性を明かせないのは、あなたが頼りないからとか、信用できないからじやなくて。

単に私の都合だよ。あなたは何も悪くない』

〈主人公〉

「だから、もう一つのお願いです。

妖精さんは自分の事を何も話せないのに、それでも私を助けてくれる……。

それはやつぱり、私がダメな子すぎて。

放つておいたら危ないと思つてくれてるからですよね。

だからその、すごく凶々しいのはわかつてるんですけど……」

「【続きを促して。主人公が何を言おうとしてるのかわかつていないうん?】

〈主人公〉

「私がちゃんと生きていいけるように、鍛えてくれませんか。

私はもうあなたを心配させたくない。

それで、妖精さんと過ごすうち。私がちゃんと立派な勇者になれたら。

その時もう一度、正体を教えてくれるかどうか、考えてくれませんか?」

主人公、ドキドキしながら妖精さんを見上げる。

自分達の関係ができるだけ長くつなぎとめるには、これがベストだと思ったが、果たし

てこの要望は通るだろうか。

一方、サリアは青ざめている。

え、これ、絶対『いいよ♥』って言っちゃダメなやつじやん。

サリアちゃんは元々、勇者ちゃんのレベル上げを手伝う予定だつたし、その間は絶対に守つてあげるつもりだつた。

つまり、今後勇者ちゃんが成長し『立派な勇者』になっていくのはほぼ確定してるわけよ。

それは、サリアちゃんが『いつまでもあたしがいないとダメな、よわよわ勇者ちゃんでいてね♥』なんて思つてないから。だつて目を離したスキに死なれたら困るじやんね？だからサリアちゃんは勇者ちゃんを『立派な勇者』にする道しか、最初から想定してない。

ゆえにこのお願いにも、イエスと言わざるを得ない……。

だからこれ、サリアちゃんに実質選択肢ないじやん。ルート固定されてんじやん。

そして勇者ちゃんが世界を救つた時点で、正体を明かさなきやダメになるじやん。

これ以上の『立派な勇者活動』なんてないんだから。

この子まさか、そこまで考えて……いや考えてないよね？

これ、わざとか？ それともこの子、素でやつてんのか？  
ぜーんぜんわかんない！ 誰か答えを教えて！ カンニングさせて下さい！

ところで言うまでもないが、サリアは問題を先延ばしにする癖がある。  
迷うと『とりあえずこの場をしのげればいいか』と思ってしまう。  
そして、こうなる。

「余裕なふりをする。内心『この約束、しちややバいやつでは？』と思つて  
なるほどね。

【少し間をあけてから】

いいよ！ 元々そのつもりだつたし。

【『OK』は『オーケー』で】

二つ目のお願ひはOK。

お姉さんが、あなたを立派な勇者にしてあげる！

私はこれから、あなたの先生になつて。

食べられる植物とか、獲物の取り方とか。冒険に必要な事を教える。

それで、今あなたが言つた通り、いつかあなたが立派な勇者になれたら。正体を明かすか、その時もう一度考えるね』

「主人公」

「妖精さん……！」

あー。やつちまつた。サリアちゃん、やつちまつたぞ。

サリアちゃんつてば、この勇者ちゃんの『ぱああ……！』って笑顔が見たくて、選択肢致命的にミスつたぞ。

サリア、これ以上『やべー』と思うのがつらいので、話を逸らす事にする。いつもそうするように、主人公の左耳にささやきかける。

【特に優しく】

じゃあ、早速頑張つちやおうか。

私がいるからにはね？

もう食用キノコと毒キノコを間違えさせたりなんかしないんだから』

〈主人公〉

「……」

だが、そんな妖精さんを見て、主人公は苦しくなる。  
妖精さんは、自分を愚かな女の子だと認識している。

だから、こんなに心配してくれている。だから、このお願ひも通つたのだ……。と。  
主人公は思う。

もし私が本当の事を言つても、妖精さんはきっと私を見限らないだろう。

『心配したんだよ！』『どうしてそんな事を！』と怒られる事はあつても、最終的には『そ  
んなに辛かつたなら、仕方ないよね』と言つて、許してくれる気がする。  
でも、ここは彼女の認識する通り、愚かな女の子のふりをしていた方が、何かと都合が  
いいと思う。

その方が、きつともつと色々教えてくれる。

その方が、もつとたくさん気にかけてもらえて、一緒にいられる気がする……。

サリア、そんな主人公の思惑など、知るよしもない。  
急に黙り込んでしまつた主人公を見て『もしかしてキノコの件で、主人公の気分を害し

てしまつたのではないいか?』と勘違いし、オロオロする。

慌てて、主人公の正面へ移動する。

「【少し慌てて】

でもあの、間違えたのは恥ずかしい事じゃないからね?

あのキノコ、本当に見分けが難しいし。

お姉さんはそういうお仕事してるから知つてただけで。

あなたが知らなくても当たり前だよ』

〈主人公〉

「……え?あの、妖精さんは、植物を扱う仕事……お花屋さん……薬屋さん?  
とか、なんですか?」

ここで話は、またサリアの話題に戻される。

主人公は、とにかくサリアの事が知りたいらしい。

あーもお。あたし、正体は明かせないって言つてるのに。話聞いてんのかなこいつ?

でもまあ嬉しいから？ それくらいなら教えてあげなくもない。よ？  
なのにサリアは嬉しくなってしまう。完全に骨抜きにされている。

「え？ まあ、お医者さんでもあるかな。本職はこの通り、人形操作の魔法使いだけ  
ど。

薬とかも作つてて、最近は……。

【『ハツ！』と、しゃべりすぎた事に気づく】

ほら。私の話はこれでおしまい。始めよう！』

**SE3** : 機械人形が移動する音

【ストーリーパートトラック1の**SE3**と同じ音】

【最初から最後まで流す】

**SE4** : 主人公がそれについていく足音

【最初から最後まで流す】

サリア、話題をそらすべく、機械人形を森の出口へ向かつて飛ばす。  
主人公はそれについて歩く形になる。

さて、何から行くか。

勉強つてよりは観光地ガイドみたいなノリの、わかりやすい話の方が食いついてもらえるかな？

サリア、少し考えてから、ある木のところでストップする。  
この森に大量に生えている『龍の血』である。

「まずはこの森の話をしようか。初めて来たんだもんね。

この木は知ってる？」

〈主人公〉

「？ いいえ」

「これはね、この辺にしか生えない『龍の血』って木なの。

見ての通り普通の木なんだけど。

昔の人は、これをずっとモンスターだと勘違いしていたんだ。

理由は……」

SE5 .. 機械人形が木をポンポンと叩く音

【最初から流す】

【0～1秒ほどのまでの、最初の『ポン、ポン』のみ流す】

「ここを切り落としてみて？」

〈主人公〉

「はい！」

主人公、携行していたナイフを取り出し、妖精さんに指定された木の枝部分を切る。すると、切り口の部分から、どろりと赤い樹液が流れ出し、主人公は驚く。

SE6 .. 主人公が木の枝を切る音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

「木なのに、樹液が赤い。血を流しているみたいでしよう？」

だから、昔の人は勘違いした。

この森が、大きな一体の植物系モンスターが根を張る場所だと思い込んだの

〈主人公〉

「なるほど……！」

よし。主人公ちゃんの反応、いい感じ。『ややウケ』くらいはしてるな！

東部じや常識だけど、北部じやああまり知られてない事だもんね。

北部とこつちじや、生えてる植物が全然違うからなあ。

「でも、そうじやないってわかつた今は、この木は薬とか化粧品とか、家具の木材に使わ  
れるようになつた。

〔少し間をあけてから〕

ねえ。面白くない？

今と昔で、この森のイメージはこんなに変わつたんだよ。

〔少し間をあけてから〕

ちなみに見た目グロすぎてとてもそうは見えないけど」

〔S E 2と同じ音〕

〔最初から最後まで流す〕

S E 8 .. 機械人形が木の実をもぐ音

〔最初から最後まで流す〕

「木の実は食べられます。取つて行こう！」

サリア、機械人形を操作し、うまく木の実をもいで、主人公に手渡して、ホツと一息つく。

よしよし、できたら、観光ガイドから始めて、実践的な知識につなげて終わり。

サリアお姉ちゃん先生、初めてにしては悪くなかったんじゃないでしょうか！

〈主人公〉

「すごい……。

なんだか急に景色が変わつて見えます。さつきまでと、見ているものは同じなのに……。

知つてゐるかそうじやないかで、こんなに違うんですね。

……あ、いただきます」

ウケてるー！ 気を遣つてウケてくれても嬉しいよ！ ありがとう！ 可愛いよ！  
グロすぎる『龍の血』の木の実に若干引いてるのも可愛いよ！  
機械人形が主人公に木の実を手渡した事で、距離が近くなる。

「【すごく嬉しい。主人公が興味を持つてくれて、テンションが上がる】  
だよね！」

「【ここから※マークのセリフ終わりまで、やや興奮気味に】

私、賢くなるつて事は、世界が明るくなる事だと思つてるんだ。  
たとえばこの森は。

何も知らずに歩いていたら、ただの『綺麗で平和な森』だよね。  
でも、珍しい木が生えてるつて知つてたら観察したくなるし。  
それが昔モンスターだと思つてわかつたら、見方が変わるよね。  
同じ景色でも、知識がある分だけ、見所は増える。  
冒険の計画も立てやすくなる。

つまり」※

〈主人公〉

「世界が明るくなる。歩きやすい、安全な場所に変わる……」

【すごく嬉しい】

そういう事！ 知識はあなたを助ける。

【少し間をあけてから】

だから、私はあなたに賢くなつてほしい。

あなたが生き残るためにも、世界をもつと楽しむためにもね。

【少し間をあけてから。ここまで一気に話したので、ちょっと不安になる】  
と、どうかなあ？」

サリア、ドキドキしながら主人公の言葉を待つ。

果たして自分の説明は、彼女の興味を惹くものだつたのか、自分は『いい先生』になれる  
うなのか。答えを知りたかったのだ。

でも、主人公のきらきら輝く瞳を見て、すぐに気づく。

たとえ自分が『いい先生』じゃなくても、この子はきっと『いい生徒』だ。  
自分の気持ちを、この子は受け止めてくれる。

だから、そんなに怖がらなくても、自分たちはうまく行くんじゃないか、と……。  
えつ？ それってやっぱり運命なんじやない？

〈主人公〉

「はい！ 私頑張ります。世界の事、もつと知つて、賢くなつて。

立派な勇者になりたいです。妖精さんのためにも……自分のためにも！  
あの！ だから、見ていて下さいね？」

「〔優しく、ニコつとして〕

そうだよ！ その意氣。

私だつていつまでいられるかわからないんだから。早く成長してね？」

〈主人公〉

「え？ 妖精さん、いなくなつちやうんですか……？」

ここで主人公の顔が急に曇る。

サリアは軽い気持ちで言つたのだが、主人公にとつては、冗談でも言つてほしくない言葉だつたようだ。

これでもうサリアはダメだ。嬉しくて息ができない。

バカ。バカもう！ 勇者ちやんったら、そんな、するような目で見るな！

今日も、この森抜けたら機械人形一回戻そうと思つてたのに、そうしたくなくなつちやつたじやん。

ほんとにこの子は、どこまで天然で、どこからがわざとなのかわからんない。もし全部がわざとなら、サリアちやん踊られまくりでしょ。

……でも、全部嘘でもいいや。キヤラ作つてもいいや。あたしも作つてるし。だから、もつと甘つたるく騙してほしい。そうしたら、あたし、わかつてて騙されるから。

……しつかし、鍛えるのも、もつと一緒にいるのも、全然かまわないんだけど。ていうかそうしたいんだけど。魔力的コストは、正直きついなあ……。

今でもかなりギリギリなのに、これからますます消費量が増えるつて事だよね。家にいる機械人形なんて、とても動かせない。

最近じや、あんなに嫌いだつた家事も全部自分でやつてるわ。おかげでコーヒー淹れるの、めっちゃうまくなりましたわよ。タダでは絶対転ばないつてすごいよね。

サリア、主人公の左耳側に移動する。

「少し慌てて」

ううん！ どこにもいかないよ。

【少し真剣に。でも、本心では『こんな約束をしてはいけない』とわかつている】  
あなたが私を必要としてくれる限り。私はずっと、そばにいる」

〈主人公〉

「じゃあ、ずっと一緒にいられますね？」

私には妖精さんが必要なんです。……でも、それだけじゃダメだから。

私もこれから頑張つて、あなたに必要とされる人になります。

そうやって、もつとたくさん一緒にいたい……」

サリア、もうどうにかなりそう。顔は真っ赤である。

おとなしい子だとばかり思っていたが、主人公はかなり積極的なタイプらしい。

こんな告白に等しい事を言われて、サリアは、なんとか『妖精さん』のキャラクターを維持するのが精いっぱいだ。

サリア、慌てて機械人形を移動させる。

これ以上すぐそばにいるとヤバい。たとえ機械人形越しでも。

【余裕なふりをする。恥ずかしいので話題をそらす】

よし、じゃあ結構歩いたし、あそこの木陰で休憩しようか。

……うわっ!?

SE9 : 主人公が機械人形に抱きつく音

【最初から流す】

【0—1秒ほどまでの、最初の『ガサーッ』のみ流す】

しかしここで、主人公が背後から抱きついてくる。

これは完全に想定外である。サリアのあたまはフリーズした!

主人公、機械人形の右耳に話しかける。

〈主人公〉

「約束。ですよ……」

えつ。ちょっとこの子、何してくれちゃってんの? とりあえず言質取りに来てるのはわかつた!

アホなふりして攻め方が容赦ないのもわかつたぞ！

サリアちゃん、わかつてゐよね？ こここの選択肢は『あいまいにはぐらかす』だぞ！  
でも……。

「【声が震える。観念して】

うん。約束、するから」

〈主人公〉

「本当に？」

「【声が震える】

絶対だよ……」

できなかつた。今度はちゃんと選ぶ余地があつたのに、できなかつた。

嘘になるかもしれないのに。『約束する』なんて、この子が喜ぶ選択肢を選びたくなつた。  
バカなのはサリアちゃんだ。もつとこうしていてほしいから、わざと逃げなかつた……。

7秒ほど沈黙。

「【なんとか余裕なふりをする。本当は恥ずかしくてたまらない】  
もう。いつまでくつついてるの？」

【優しく叱る】

この身体、デリケートなんだよ？  
ちょっと力を入れただけで壊れちゃうんだから」

〈主人公〉

「……」

しかし、主人公は言う事を聞かない。機械人形をぎゅっと抱きしめたまま、首を振る。サリアはドキドキしながら、必死に自分に言い聞かせる。

いい？ わかつてるよね？ サリアちゃん。

この子が好きなのは『妖精さん』だよ。

いつも近くで自分を助けてくれる、無償の愛をくれる、優しいお姉さんだよ。

いつも遠くから見てるだけで何もしない、そのくせ見返りを求めずにはいられない、自分勝手な『サリアちゃん』じやないの。

でも嬉しい。それでもいいから、もっと求められたい。

あたしと勇者ちゃん、こんなにお互いが必要なんだもん。それくらい、よくない？

【少し間をあけてから。余裕がなくなる】

仕方ないなあ。

【少し間をあけてから。かすれた声で】

もう少しだけだよ……』

このままフェードアウトして終了。